

患者の「食べたい」という思いに
寄り添う看護
～棒付き飴の摂取を目指して～

湖東厚生病院

東病棟（地域包括ケア病棟）
吉田 穂乃香

はじめに

誤嚥リスク高く、誤嚥性肺炎を繰り返している
認知機能低下→点滴、経鼻胃管等の自己抜去



胃瘻造設の治療方針



食に対する意欲が強く「**食**べたい」と訴える

事例紹介

名前:A氏 年齢:77歳 性別:男性

診断名:誤嚥性肺炎

既往歴:脳皮質下出血(左片麻痺、頸部後屈)

認知症、高血圧

通院当時は食事指導を頻回に受けていた

ADL:全介助

誤嚥性肺炎を繰り返し入院、認知機能低下により

点滴や経鼻胃管等自己抜去の可能性あり。

胃瘻造設し経管栄養開始。

看護実際

看護問題

誤嚥性肺炎を繰り返している

看護目標

肺炎予防しながら口から飴を摂取することにより欲求を満たすことができる

看護介入

- ・痰吸引と口腔ケアの実施
- ・飴摂取前にアイスマッサージや嚥下体操の施行
- ・理学療法士の指導を受け、安楽な体位を統一して行う

倫理的配慮

患者・家族へは研究の趣旨を伝え、自由意志による承諾とし、また個人を特定されたり口外することはないことを説明し、同意を得、A病院倫理委員会の承諾を受けた。

結果

口腔内保清

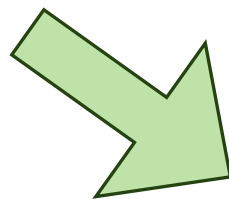
スポンジブラシの活用
痰吸引

アイスマッサージ

ジュースを湿らせた
スポンジブラシを凍らせる

体位の工夫

クッションを使用し
頸部後屈予防



肺炎の再燃なく
飴の摂取できた

考察1)

「食べたい」気持ち強い

絶食・寝たきり → 口腔内の清潔保たれにくい



口腔内保清・アイスマッサージ



肺炎予防

考察2)

経口摂取が難しいことを理解できていない



「食べたい」という思いを汲み取り、飴を活用



口から味わう楽しみ

満足感

結論

口腔ケアと体位の工夫による肺炎予防を行い、棒付き飴を摂取できたことは、口から感じる味覚や食べる楽しさを持たせ、患者の「食べたい」思いに寄り添うことにつながった。